

2017年7月  
1123号

# 万葉

Manyo

一冊の会 編集部

〒160-0015 東京都新宿区大京町5  
(一冊の会研究室)

## 一冊の会の歩みを振り返る ～草の根の力で社会を変えられる～

梅雨明けの宣言は出ていないものの、青空と太陽に夏の訪れを感じた7月9日、大変嬉しいことに新しいメンバーを迎えて櫻華塾が開催されました。

嬉しいニュースは続き、平間幸江研究員が毎日書道展で秀作賞を受賞されたことが発表されました。毎日書道展は今年69回目となる、大変歴史ある書道展です。この素晴らしいニュースに会場は沸き、平間さんへ拍手が贈られました。



平間幸江研究員に拍手

### 【万葉創刊号発刊の辞を読んで】

藤澤まり子さん(会長付き)から、万葉創刊号に園田天光光先生からいただいた発刊の辞を改めて読み返し、先生の偉大な影響力について、お亡くなりになられた後の「偲ぶ会」の様子も交えながら、語られました。

鳥飼さんから、同じく万葉創刊号に相馬雪香先生からいただいた発刊の辞を読み、難民を助ける会を始めとした先生の功績やお言葉を調べ、何もできないと謙遜するのではなく少しでも社会に貢献できるように活動していく決意の発表がありました。

### 【タンザニア連合共和国の新しい大使との初顔合わせに同行して】

初顔合わせの様子は万葉1122号に掲載。新井明子事務局次長が報告されました。特に、日本タンザニア友好協会設立のおりに高円宮妃久子殿下に御成り頂きタンザニア大使公邸に記念植樹した三春の滝桜が、今年も見事な花を咲かせたことを新タンザニア連合共和国チカウェ大使がお話しになり、「毎年桜の時期が来たら何らかの形でお会いしたい」と提案があったという報告に、一冊の会が大切にしてきた草の根の活動の精神を受け継ぎ、世界平和のために灯を絶やさないようにせねばと一同引き締められました。

続いて同行した若手2名がそれぞれ感じたことを発表。山内研究員補は撮影担当として随行し、会長の「顔合わせを成功させたい」という一念と、そのための周到な準備に感銘を受け、またとない学びを得たと発表しました。城杉研究員補は、新大使から国を背負っている気迫を感じ、素晴らしいオーラを放っている方と同席できたことに感動したと同時に、矢野アフリカ開発協会会長、佐藤元大使共に豊富な経験と話力で場を盛り上げて下さったと報告。また、矢野会長の秘書の長谷川さんの素晴らしい通訳を目の当たりにし、自分もこのような場に相応しい力を身に付けたいと誓ったと発表しました。

### 【万葉2号を読んで】

上ノ町さんから、特に40ページ「真実の歴史を未来に」を読み、歴史の上では知っていても中身は知らないことばかりである事を知り、次の世代に繋ぐことの大切さを感じたと発表がありました。万葉2号の発行は戦後60年の節目の年。そして今、自身が「1946.4.10～初の婦人参政 権行使と日本女性自立への出発(たびだち)」の元となったアンケートデータの打ち込み作業をしている中で生の声に触れ、歴史の背景が

あって今の私たちがあることをかみしめたとのことです。今日までの実績を積み重ねた先輩方に心から敬意を持って接することの大切さをしみじみと語られました。

#### 【大槻会長から】

まず会長から、一冊の会の語り部ともなる講師の候補者の紹介があり、改めて一冊の会の歴史と、世の中の出来事と合わせて踏まえた上で活動して欲しいとお話がありました。1965年浴風会にオムツの寄贈を始めた頃からのメンバーである長岡さんと岸田さんが、今日この場におり今でも会長と共に活動を続けていることは大変なことで、長い間一貫して活動されている先輩方を道標に、我々若手も息の長い活動を続けていく勇気をいただきました。



一冊の会は「平和と人権」草の根ネットであると万葉創刊号の発刊の辞で相馬先生がお書きになっているとおり、初心を忘れず活動を続けてきたこと、そして100年目という長い未来を見据えて活動をしていること、持続していくために大切な考えを惜しみなく会長は私たちにお話してくださいました。

最後に司会の小山副会長が「襟を正して活動していきましょう、この相馬先生の応接室に相応しく誇りをもって。」と結ばれました。

#### 【石田理事長から】

タンザニア大使と胸襟を開いて話せたのも、もちろん矢野会長や佐藤元大使の力もあるが、昨日今日でない一冊の会52年の歴史の重みがあつてこそ。また、会長、小山副会長、先輩方の気持ちを知り、講師の機会が与えられたからには自分が本当に伝えたい事を見つけてほしい。

先日都議選があつたが、大事なのは選挙のあと。もちろん投票することも大切ですが、当選した政治家に厳しく問いただしていく。応援しなかった人が当選したから粗探しばかりするのはダメです。厳しく鍛え育てる有権者の姿勢、それがないと民主政治は成り立ちません。草の根の1人1人は無力ではない、力があり、社会を変えることができる。それは一冊の会の歴史が物語っている。信念を見定めながら、次の50年100年につなげていく、大槻会長にもう一度皆さんで拍手を贈りましょう。

今回、林弘子宮崎公立大学学長の訃報の新聞記事を資料として配布されました。大槻会長は一言「知っているだけでは心がない」と触れられただけでしたが、林学長がお亡くなりになってから約7か月、慌ただしい日々を過ごしゆっくり追悼する暇を作らなかったことを反省しました。しかし、ただ悲しみを共有するだけでなく、先生から一冊の会がいただいたものをきちんと知り、よりよい未来を見据えて遺されたものを仕上げ上げていく、そのような前向きな力に転換してこそ初めて「知っていますよ、悲しいです」と言える資格があるのだと感じました。

私を含めて若手の力はまだまだですが、学びを活かし日々前進していくことで、たとえ今日は1mmの歩みでも積み重ねていければ草の根の力を受け継ぎより良い平和な社会を作れるよう、学びを続けてまいります。(赤田)

本人以上に才能を信じてくださる会長に最大の敬意を表します。文章で人に気づきを与え世界に何らかの貢献ができれば幸いに存じます。(平間)



文責：平間研究員、赤田研究員